

富山大学同窓会連合会設立の挨拶文

本日、富山大学同窓会連合会が設立されたことに対して、富山大学を代表して、心よりお祝い申し上げます。大変おめでとうございます。また、ご多忙の中、ご臨席賜りました石井知事をはじめご来賓の方々にも厚くお礼を申し上げます。

本日は平成 19 年 10 月 6 日でございますが、約二年前の平成 17 年 10 月 1 日、富山県内の国立三大学である旧富山大学、旧富山医科薬科大学、及び高岡短期大学の再編・統合により、8 学部をもつ日本海地域有数の総合大学として再出発いたしました。そして、その年の 10 月 13 日、秋晴れの富山市国際会議場で盛大な開学式を挙行了ことは皆様方の記憶に新しいと思います。

あれからわずか 2 年後に、本学の 8 つの同窓会が、各同窓会間の一層の相互交流や卒業生と新富山大学との密接な連携・協力を目的に、同窓会の連合体が設立されましたことは、まことに意義深いことと思います。新富山大学にとっては強力な「サポーター」、また、何でもご相談できる「目付け役」を得たようで、大変うれしく思っております。

同時に、私は連合会の総会員数が約 7 万 5 千人に及ぶと伺い、8 学部それぞれの学生教育に対する長い歴史を想起せざるを得ませんでした。詳しく述べられませんが、人間発達科学部のルーツは最も古く、明治 8 年に富山市総曲輪に設立された「新川県師範学校」にまで遡ることが出来ます。130 年前のことです。また、薬学部的前身、共立富山薬学校は、明治 26 年に富山市梅沢町に開学したと記されています。これは新川県師範学校の設立から 18 年後のことです。この二つの高等教育機関が明治 5 年の学制頒布直後に開設されたことから、富山県の明治人が師弟教育に対していかに熱い情熱を注ぎ込んでいたか、が窺われます。

さらに大正 12 年には、人文学部と理学部的前身、旧制富山高等学校が篤志家・馬場ハルさんのご寄付により開学しております。設立場所は現在の富山市ではなく、町村合併前の「大広田村蓮町」となっております。ライトレールが走る現在、会員の中には都市化以前の岩瀬の田園風景が髣髴としてよみがえり、まさに今昔の感に浸っておられ方も、あるかと思われれます。

経済学部は大正 13 年に県内第二の都市・高岡市に設立された高岡高等商業

学校を母体としております。ところが、太平洋戦争末期以降、幾多の紆余曲折を経験しております。ちなみに、昭和 19 年、高岡高等商業学校が高岡経済専門学校に改称されると同時に廃止されました。軍需生産増強を理由に高岡工業専門学校に転換されたのです。いかに国策とはいえ、当時の高商関係者にとって自分の学校と学生が消滅するという苦しい気持ちをどう耐え忍ばれたか、今日では推し量る術也没有ありません。

経済専門学校は新制富山大学の文理学部の一学科、経済学科として復活しますが、経済学部として独立し得たのは廃止から 10 年後の昭和 29 年のことでした。

太平洋戦争が終わりますと、文部省は新制大学の設立の審議に入りましたが、その過程で旧制高等学校や旧専門学校がそのままでは存続出来ないことが次第に明らかになり、全国各地で「大学昇格運動」が巻き起こりました。本学に関わる二つの動きを紹介します。

高岡工業専門学校は敗戦直前に高岡経済専門学校の転換・廃止により誕生しましたが、4 年を経ずして廃校が懸念され、「工業大学への昇格運動」が起きました。時あたかも高岡市は大雪に見舞われ、卒業近い 3 年生のみが授業を受け、1・2 年生 400 名は工業大学昇格運動への高岡市民の理解を得るため、無報酬で市内の屋根雪下ろしに出動しました。私には学生たちの自分の学校を思う、けなげな行動が眼に浮かぶようです。北日本新聞は「昇格願う雪降ろしデモ」と報じた、と『富山大学 50 年史』は語っています。

もうひとつ、今日からみても大変興味深い運動、「富山連合大学案」を紹介します。これは当時の高専や師範には「単科大学指向」が非常に強かったことから生まれた提案だと云われています。ちなみに、連合大学案とは、旧制富山高校を母体とする富山文化大学あるいは富山社会大学を富山市蓮町に、富山薬専を母体とする富山薬科大学を奥田町に、富山師範及び青年師範を母体とする富山教育大学を五福に設置し、さらに、高岡工専を母体とする高岡工業大学を高岡市古定塚に置くというプランです。

ところが、この構想も昭和 23 年文部省の「1 府県 1 大学方針」の決定により消滅し、昭和 24 年に文理、教育、薬、工の四学部をもつ新制富山大学の発足へと、事態は大展開しました。これ以降も大きな動きが起きておりますが、本日も出席の会員の皆様の実体験の範囲内ですので、要点のみ申し上げます。

昭和 39 年富山大学評議会は工学部を高岡市から富山市五福に移転することを決定しました。これにより、高等教育機関を失う高岡市を中心に新大学設置運動が起こり、昭和 58 年、芸術文化学部の母体となった国立高岡短期大学が開学しました。他方、この間の昭和 50 年には、一県一医大構想により、富山医科薬科大学が杉谷地区に開学し医学部を設置されました。翌年の 51 年に富山大学から薬学部を移行、さらに、53 年には和漢薬研究所も移行しました。

このように 8 つの学部の歴史を辿りますと、一見離合集散の繰り返しのようにも見えます。しかし、私には各学部の設置場所は異なるものの、必ずしも時代の潮流に流されようとせず、教職員・学生・市民が一丸となって質の高い高等教育の実現・維持のため、相互に啓発し合い独立の道を求め、また相互に融和しながら世に優秀な人材を送り続けてきた事実を明確に確認することができます。さらに、私が最も申し上げたいことは、2 年前の三大学 8 学部の再編・統合は歴史的、また地域的な必然であったのではないか、ということです。

現在、再編・統合後三年目を迎えた新生富山大学では、21 世紀社会に一層貢献するため、約 2 千人の教職員と 1 万人の学生・院生が最大限に持てる能力が発揮できるよう、「教育研究体制の再構築・改革」に取り組んでおります。富山大学同窓会連合会の皆さまからの、本学への忌憚のないご意見とご指導ご支援を賜りたいと思います。

最後に、富山大学同窓会連合会会長中尾哲雄様をはじめ、人文学部同窓会、富山大学教育学窓会、越嶺会、理学部同窓会、医学部同窓会、富山薬窓会、仰岳会、そして創已会の会員の皆様のご健康とご発展をお祈りして、ご挨拶いたします。

平成 19 年 10 月 6 日、富山大学長 西頭 徳三